



皆川泰蔵え

この頃思うこと

渡部 忠男

つい先年まで勤務の関係で大阪にいて毎日満員電車のご厄介になった。いなか者のこととて始めの頃はものすごいラッシュに全く当惑したものだ。懐中ものご用心のアナウンスをいつも聞きながら二度もやられ、ガチャンとしまる自動扉に雨傘をはさんで発車を遅らせ赤面し、せっかく買った新品の靴をふみつけられくやしがつたり

想

随

あれこれいろいろ経験した。窓ガラスが無惨にこわれ、そこらの人が血まみれになったときはちよっと惨憺な気持ちになった。幼児の悲鳴を聞いたら憤慨もした。なんとかならぬかと考えもしたが、しょせんどうにもならぬこと、やはり人様同様にラッシュにもまれ満員電車に乗るしか方法のあるはずはない。

ところで自己防衛が馴れるに従って満員電車に乗る側でもコツを覚え電車の乗り口降り口は次の行動に便利なところを選び、電車の中でも比較的にもみあう圧力の少ない場所を研究し、まわりが女性の方が気分もいいし押され方もらくだと思ったり、扉の締りぎわにすつと体を押し入れる乗車テクニックまで上達してきて、人にあつかましいと思われもしただろう。遠慮深くやる人情は心得ているが、なかなか満員電車がそうさせないことがある。

余談が長くなったが、静かな郷土の松江に帰りつくづく思うことだが大都市の過密を地方に分散する工夫はないものだろうか。経済の原則を待ってはともちががあきそうにない。なんとか政治に乗せて満員

電車の苦しみを解決する方法はないものかこんな夢をいだいている。田舎の田園をスマートな電車が走り、乗客もすずしい顔でゆうゆうと出勤する。能率のいい工場が建ち、まとまりのいい商店街が生まれる。自然に恵まれた環境の中で楽しい生活が出来そうである。人口の減る地方と過密に悩む大都市、このアンバランスは早晩解決しなければならぬことと考える。

銀行の仕事をしていて最近「実力主義」とか「能力主義」とかよく耳にする。人事管理の面で給与体系を実力主義に連結するとか、昇進昇格を能力主義で行うとか、すべて理屈として合理的で納得も出来る。人事制度の方向も確かにその線に従って進んでいる。ところで人の評価とその適用について問題はなからうか。立派な制度が出来てもその評価と適用に遠慮があったり、情実にこだわったり、躊躇があつたら昔の年功序列も大差なくなってしまう。今では学卒とか復修学科とかに極端にこだわってその先入感で人を評価することも少なくなつたようだ。大学で学んだ知識が生かされて

実力となってこそ期待される人物であるうえ、教えられた知識がよく記憶されているだけではものたらぬ。やはり生々としたすぐれた企画力、豊かな判断力、するどい直観力こまかい観察力、幅広い理解力・強力な実行力などこの職場でも必要とする戦力にならねばならない。この戦力が求められる実力主義であり、能力主義となって評価されねばならない。「実力主義」「能力主義」が経営のムードで唱えるだけでなく、評価し適用する側でも、される側でも安易に「大学卒の知識人」だけではすまされなくなつたようだ。職場の四囲をながめて「実力主義」「能力主義」の厳しさは更に加わつて行くだろうと思つてゐる。

(昭15 高商・山陰合同銀行総務部長)

想い出からの念願

松山 武司

大正十三年に大学の法学部経済学科を卒業して直ちに助手に任命され、今日まで四

十四年間勤続してようやく六月末に定年退職するに至つた私にとって、かずかずの想い出が浮かんで来るが、その中でまず第一に感ずることは大学のキャンパスについてである。

私が予科(當時は予科二年、大学三年のコースであつた)に入学した當時は現在本部のある有終館の階下が予科の教室であつた。入学当初は烏丸から河原町までの今出川線が敷設されていなかったので割合静かに講義を聞くことができたのであるが、その後しばらくして烏丸から寺町までの今出川線が開通したことによつて、電車の騒音に受講に支障を来したこともしばしばであつた。また現在、明徳館のある敷地にあつたバラック教室は実に貧弱きわまるもので、今日の同志社学園のどこにも見られないような寒々としたものであつた。

大学の法学部経済学科に進んでから始めて教室らしい教室で講義を聞くことができた。とは言つても、その教室は致遠館の二階で、ここが法学部の教室にあてられて、百五十人程度を収容する大教室と、六十人ばかりを収容する中教室と、二十人ばかり

を収容する小教室二つとの四教室だけのものであつた。

今日、今出川キャンパスには近代的な大建造物が立ち並んでおり、それでもなお教室が不足するために新町校舎までも増築されている現状を見て、昔を知る者は隔世の感をもたざるを得ないであらう。教室や研究室は実に堂々としたものとなつたが、校庭はポスター、ビラが張りめぐらされ、立看板が至るところに立てられており、強い風が吹いてこれが倒れたら何時怪我をするかも知れない現状である。言うまでもなく大学は学問研究の場である。従つてこの学問研究の場にふさわしい雰囲気があり環境であることが望ましい。今日、同志社大学のキャンパスはこの学問研究の場にふさわしい環境を作っているであらうか。その逆現象を呈していると言わざるを得ない。先年ケンブリッジ大学とオックスフォード大学を訪れたことがある。さすが名門の大学だけあって、両大学とも校庭には芝生が敷きつめられ、紙屑一枚、吸殻一つ落ちていない美しさに感心させられたのであつた。同志社大学でも昔、奥村龍三氏が総務部長

時代に校庭の美化運動が実施され、紙屑も吸殻も所定の容器に入れることにして、現在とは比較にならない美しさを保っていた。それがいつの頃からか忘却される際もない現状に堕してしまった。ビラやポスターも学生課の所定の用紙を使用していちいち届出で許可を受けて所定の掲示板にだけ貼る仕組みになっていたので、現在のよう

に無統制な立看板の林立する、言うなれば大学のキャンパスらしからぬ雰囲気は見られなかったものである、今日は学生の力が強くなったので学生部はこの現状を放任するより仕方がないのであるうか、嘆かましいことである。

嘆かわしいと言えば同志社タイムスが最近号に報道しているように、学生の圧力によって大学長の選挙まで阻止されるに至った学生の行動である。これは創立者新島先生が同志社大学を設立されたその御意図を無視するの行動と言わざるを得ない。大学の自治は学生のための自治でないことは言うまでもない。学生の自治会の活動は学生としての自分を逸脱しない範囲内での自治活動であるべきである。大学らしい大学を作

るために学生諸君の良識ある行動を切に望むものである。定年退職する私は、せめて校庭の美化運動を再現してもらいたいことを念願するものである。

(大13大経卒・元経済学部教授)

デントン先生追憶

有田みち子

誰でも生涯にわたって大きい影響を与えるられる人に、一度は必ず出会うものがある。二人、三人と出会う人も多いと思う。

私にとってこの意味での最初の出会いはミス・デントンであった。普通部に入学したばかりの数え年十三才の私には、デントン先生は初めて見る異国人であり、不思議な存在であった。先生が年中黒い裾の長い洋服を着て、びっこの足をひきずりながら、旋風のように静和館の廊下にあらわれると、たちまち礼拝におくられて教室に待機していた女学生たちの間に、時ならぬ大嵐が生じる。それに加えて、半分以上は伝説

となっているような過去の業績の数々を聞かされると、ますます面くらうのである。

教室では独立話に悩まされ、どう思い返しても不公平としか受取れぬ生徒の取扱い方を見ているうちに、この異質の先生は独身だから奇矯な行ないが多いのだろうと解釈して、だから女は結婚しなければいけないなど、子供心に考えたのであった。

さて終戦後に話とはぶのだが、クラブ先生のかかれた *The Life of Miss Denton* をグイン先生がかして下すった。私はこれこそ幼い心に深く根ざしていた疑問を解くチャンスだと思った。この本にはミス・デントンの有名な逸話の一切の他に、友人あてにかかれた手紙が数多く採録されていて、立派な伝記文学である。

手紙の中で、親友のミス・ボズビエルに淋しくてたまらないから、早く日本へ来てくれとねだったものが、強く私の心を打った。あの恐かったデントン先生の一面にこんな人間性が潜んでいたのかと、目を見張る思いをしたからである。マクリン幼稚園の土地購入についての末光先生とデントン先生の考えの行き違いや、兎が跳び出し

そうだといわれた、自分のことには無頓着な先生のベッドの話など思い出し笑いの種になった。

しかし、戦時中最後の交換船でデントン

先生もまた、日本からの引上げを強制された。先生は老いの身の赤道直下の死を予感して密かに白布の屍衣を用意してられたと読んだ時、ふと私は先生の心の室に入る鍵

オリンピック出場について

松久ミユキ

オリンピック出場権を得るまでには、三回にわたる予選会が行なわれました。まず、第一回は昨年十二月末、名古屋で全日本選手権を兼ねて行なわれましたが、その時、私は右肘骨折のため欠場、これでオリンピックへの道はたれたと思います。しかし、推薦というたつた一つの道が残されていました。幸いにも推薦が決まったのは、二月中頃、その間悲観と不安感の毎日でした。だけど推薦が決った時、大きな希望で胸が一杯になりました。それから、くる日も、くる日も練習にあけくれました。

第二次予選会は、五月中頃、岡山で開催されました。第一次予選には出場できなかったのですが、この試合では自分の実力

どの程度発揮できるか、不安で自信がな

かったけれども、思い切って自分の力を十二分にぶつけた結果、それがかえって良かったのか、思いがけなく優勝してしまつた。それから、最終予選を目指し、第二次予選での過失を少しでも克服するために、練習を重ねました。いよいよ七月二十四日の最終予選までけがなく自信をつけて、試合に望むことができました。決して満足できるものではありませんでしたが、総合優勝し、無事予選を通過することができた。

これから日本の代表選手として、恥ずかしくないように充分に練習を重ねてオリピックに臨みたいと思います。

(昭39 女子高卒・メキシコ・
オリンピック派遣選手)

を発見したと思った。先生は若い日に日本へ初めて渡来された時にも、恐らく死を賭して来られたであろう。召命感に燃えた若い先生の胸中には、見知らぬ桜の国の乙女たちへの無限の愛情が満ち溢れていたであろう。ただ、その愛があまりにも深く激しかったので、表面しか見ない、どちらかといえば常識家の私には躡きの石となつてしまつたのである。一度この鍵を手に入れるや、デントン先生の同志社と女学生に対する熱愛が、びしびし私の胸にはね返つて来た。

幸いに、同志社当局者の奔走と文部省の協力によって、デントン先生は戦時中も日本に止まり得た数少ない外人の一人となられた。戦後間もなく、星名先生の行き届いた看護をうけて先生は永遠の眠りにつかれた。

本に書かれてある棺の中の黄菊白菊に埋められた神々しいばかりの先生の御顔が、目の前に見えるよううで、私は時々厳肅な思いで教壇に立ち、自分の愛の不足を反省するのである。

(昭15 大卒・鳥取大学教授)

恩師とひざかけ

黒田 成子

母校同志社を離れて三十年余、若い日に学びを受けた恩師の面影は今なお鮮かな印象を私に残している。中でもピアノを習った Miss Francis B. Clapp は忘れ難い先生である。

ピアノ・レッスンはいつも厳しく、練習不足の言いわけなどけっして通るような先生ではなかった。私もこの一徹で熱心な先生のもとで一生けんめい練習に励んだ一人であるが、女子専門学校を卒業する頃、先生は私に卒直にこう言われた。「あなたはピアノちょう、(ちよっとの意)上手です。さっぱりか弾くのはかまいません。けれども……」つまりピアノはあまり上達しないだろうということだ。

先生の予言どおり、私のピアノはものにならなかった。しかし私は先生の厳しい中にも溢れる誠実さと温情が忘れられず、長くとだえていた文通をまた始めるようにな

った。先生はいつも教会のこと等書くとき喜ばれ、ご自分もボランティアの活動をされていることについて書いてこられた。

ある日突然、私の家へミセス・サカムラという宛名の小包が米国から届いた。差出人はクラップ先生である。宛名の人が転居したとみえ、転居先不明の印が押してある。しかも配達不能の場合は誰々の所へ回送してほしいという欄に先生が私の住所を書かれたので小包が私の所へ来たのである。品物の欄には「ひざかけ」と記してあった。

私は途方に暮れてしまった。どこへどう連絡しようにも何も思い当たらない。しかし、よく考えてみると品物がひざかけであるから、これはきっと同志社関係だろう。たぶん教える子のために先生ご自身が編んであげたものかもしれない。そう思って五、六年も前に求めた部厚い同志社同窓会名簿のページをくつてみた。坂村という姓の同窓生を片っぱしから卒業年度のページとてらしながら東京在住のそれらしい人を選び、電話をかけてみた。すると別の人が出て来て、坂村さんは何年も前に他へ引越さ

れたがどこそこへ電話をかければお電話がわかるかもしれないということであった。電話番号がやっとわかったが、いくらかけても返事がない。仕方なく電話帳にとりこんで、クラップ先生のご好意をお伝えしなければの一念で住所を探し出した。そして坂村さんにハガキを出し、ひざかけの小包を取りに来て下さいとお願ひした。

一週間ほどたったある日、私の家の玄関に表われたご本人。実はお嬢さんが私の勤めている東洋英和女学院短期大学のすぐ隣りの高等部三年生で以前から私を同志社の同窓生と知って見かけていらした由。しかもぜひ短大に進学したいのでどうぞよろしくと言われ面くらってしまった。

その半年後クラップ先生は同志社の創立九十周年のお祝いのため日本に来られ、私は東京の国際文化会館で昔と少しも変らないう、かくしゃくとした先生にお会いすることが出来た。先生のご来京を今度は坂村さんが私に知らせ下さったことを思うと恩師のひざかけをめぐる縁は心暖まる楽しい思いがする。

(昭和11女専卒・東洋英和短大教授)